

論文審査の要旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 (文学) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	吉 慶
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) 『山上宗二記』における茶湯思想に関する研究			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)	教授	衛藤 吉則	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	教授	村澤 昌崇	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	准教授	後藤 雄太	
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)	助教	岡本 慎平	
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文は、千利休 (1522-1591) の高弟・山上宗二 (1544 - 1590) によって書かれた『山上宗二記』 (1586 年成立) を主たる研究対象とする。具体的には、『山上宗二記』の写本 (自筆原本は存在せず、「雲州岩屋寺宛 (表千家本)」および「皆川山城守宛 (尊経閣文庫)」の写本を利用) と関連資料を対象とし、文献調査と文献分析 (文献実証法・批判的解釈法) に基づき考究する。『山上宗二記』は、宗二の茶湯思想を広く反映する基礎史料であり、本論文では、彼の茶湯思想について、大きく、(一) 茶湯の歴史 (起源)、(二) 茶湯の実態と茶人論、(三) 道具、(四) 茶人の心構え、(五) 茶湯の思想、の五つの観点から分析・解明する。茶人として著名な山上宗二自身の言葉で語られる道具論・茶人論・茶湯思想を明らかにすることで、宗二特有の物の見方を知ることができ、この著作を通じて中世の茶湯思想の一つの傾向を伺い知ることが可能となる。</p> <p>先行研究としては、竹内順一『山上宗二記』 (2018)、尼ヶ崎彬『利休の黒―美の思想史』 (2022)、朴珉廷『そそのの哲学 数寄茶湯の原点』 (2019) 等があるが、それらを通覧するかぎり、歴史学や文献学の立場からの研究がほとんどといえる。しかも、そこでなされる実証的研究は表層的な事実の記述に留まり、宗二の言葉に表れる精神の息吹と深遠な思想体系に踏み込み、宗二の茶湯思想の意義をとらえることができていない。本研究は、そうした手つかずの精神領域に踏み込み、宗二の思想構造を解明し、その全体像の体系づけをめざしている。</p> <p>また、本審査では、予備審査で指摘された、①研究方法における本論文の立場の明瞭化 (歴史分析的研究か文献解釈学的研究か)、②本研究の思想史上の位置づけ、③茶湯思想における山上宗二論の特徴 (千利休に比した独自性など)、④本課題に対する専門学会での反応、⑤現代社会における本研究の意義、⑥投稿論文や学会発表の一覧表提示、⑦解釈学における理論構造の妥当性が解説された。</p> <p>論文の構成は、次のとおりである。</p> <p>第一章では、『山上宗二記』における宗二の『論語』 (「為政第二」) 理解に焦点を当て、彼が考える茶人の稽古論を浮き彫りにする。これまで、『山上宗二記』における『論語』の役割を探求し、茶人の稽古の理念に焦点を当てた研究は少なく、本考察はそれを補う点で意義を有する。具体的に、本章では、師弟関係に着目し、茶人の実践が 15 歳から 70 歳に至るまでの各年齢段階でどのように展開されるのか、そして稽古の主体がどのように変化するのかを解明する。同時に、『山上宗二記』における宗二の『論語』解釈を通じて、彼の稽古・修行論における『論語』の意義や役割を明らかにする。</p>			

第二章では、『山上宗二記』で説かれる「茶湯の起源」に関して論述する。この課題について、先行研究では主に歴史学の立場から行われており、宗二の言葉とその背後にある思想に焦点を当てた研究はほとんどない。本章では、まず、宗二が説く茶湯の歴史を分析することで、「遊興」が「楽道」としての茶湯に発展する過程を描出し、次に、彼の思想面に光を当てるべく、そうした見方の背後にある「楽道」の性格と芸術思想を解明する。

第三章では、『山上宗二記』に示される「茶湯の道」を考察する。本書では、「道」という言葉が13回使用され、これが「茶道」という概念の形成に大きな影響を与えていることが分かる。しかし、先行研究では、「道」の哲学的側面についての考察が不十分である。そこで、本章では、「道」に関わる「一道」「楽道」「御数寄道」「此道之奥之奥」に着目し、その用例を分析し、その概念を、詳細に定義づけることを試みる。

第四章では、従来、『山上宗二記』における「師匠」の思想、とりわけ師匠の渡世（職業）論について考究する。先行研究において、師匠は、初心者に茶湯の技能を教える師という意味で「茶湯の指導者」と解釈される場合がほとんどである。しかし、筆者の見解では、「師匠」を単に技能の教師として捉えるのは不十分であり、技能を導く深い精神性への注目が必要と考えられる。それゆえ、本章では、茶人の心構えを示す「又十体の九」のテキストに基づき、茶湯の道における師匠の心得の内実を解明する。

第五章においては、第四章に続き、これまでほとんど先行研究で考察されていない「十体」「又十体」という初心者に教示する茶人の心得に「思想面」から光を当て、思想の核に置かれる、修行の心・創意・粗相の規則という三要素を明らかにする。

本論文は、次の5点に独創性があり、高く評価できる。

1. 『山上宗二記』における宗二の『論語』解釈を通じて、茶人の「稽古」における『論語』の意義や役割を明らかにする点。
2. 『山上宗二記』で説かれる「茶湯の起源」に関して、宗二の言葉とその背後にある思想を通して浮き彫りにする点。
3. 「道」に関わる「一道」「楽道」「御数寄道」「此道之奥之奥」に着目し、その用例を分析し、「道」の哲学的側面を明らかにする点。
4. 「師匠」を単に技能の教師としてのみ捉えることを超え、技能を導く深い精神性に焦点を当て、茶湯の道における師匠の心得の内実を解明する点。
5. 初心者に教示する「茶人の心得」である「十体」「又十体」という概念に「思想面」から光を当て、修行の心・創意・粗相の規則という三要素を明らかにする点。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和6年7月31日

備考 要旨は、A4版2枚（1,500字程度）以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed A4 size, 2 pages (about 500 words).)